

日本ラグビーの未来

ラグビーワールドカップ2019を終えて

元ラグビー全日本代表選手／解説者

大西将太郎

おおいし しょうたろう

数多くの物語をつくり出し、夢のような4日間が終わった。

経済効果は4370億円、チケット販売率は99%を上回り、全国12開催都市の合計観客動員は170万人を超えた。

「日本ラグビーの未来」というタイトルは、2015年1月号の当欄に故平尾誠二さんが寄せたエッセーと同じである。当時、このラグビーワールドカップ日本大会がこれほどまでに盛り上がり、たくさんの記録を塗り替え、世界中の人々の記憶に残る大会になるうとは誰が想像できただろうか。

ラグビーワールドカップの歴史を振り返ると、これまでの大会は、ラグビーが文化として根付いている国々で開催され、ゴールキックを蹴る時には静かにすることや絶妙なタイミングでチームを鼓舞する歌を歌い出すなど、従来からある応援スタイルでスタジアムは自然と盛り上がった。いわ

ば観戦するファンも見識のある人たちだ。文化として根付いているとはいえないアジアでの初の開催、日本のスタジアムはどのような雰囲気になるのか、期待と不安が入り混じるなか、大会は開幕した。

開幕セレモニーでは、連獅子の舞踊や和太鼓の演奏など、日本の伝統を発信し、満員の会場はいよいよ祭典が始まるぞという空気に変わった。開幕後も、各地の試合会場では、世界のファンと日本のファンが一緒になって独自の雰囲気をつくり上げながら、「日本でのラグビー観戦スタイル」を確立していった。

各地の試合会場に足を運び感じたことは、スタジアムの「一体感」だ。国



時の調べ
Essay

歌斉唱に加え、日本大会独自のカラオケタイム。ハーフタイムに「カントリー・ロード」や「スウィート・キャロライン」を観客が一体となって合唱した。ラグビーの応援に、スタジアム内での境界線はない。各国のジャージを身にまとったファンが客席に入り混じり、1つのスタジアムで熱狂する。

世界中から訪れた人々は、対戦国の国歌を覚え



て歌ったり、試合後にはお辞儀をしてファンにお礼をしたりするといった日本独自のおもてなし、ホスピタリティ精神をたたえた。反対に日本は、世界中から集まったファンから、大いに歌い楽しみ勝敗とは別に健闘をたたえ合う観戦のマナーやフェアプレーを大事にするラグビー精神を学び、ラグビーが持つ本質的な価値が社会に与える影響を学んでいった。

人間関係が希薄化する現代において、ラグビーは、国境を超えた多様な人々とのかわりを生み、また、多様な価値観に触れる機会をもたらす。相手を尊重し、理解し合う。そこから生まれた「ONE TEAM」は計り知れない力を生み出すことを教えてくれた。

前述した故平尾誠二さんのエッセーには、「ワールドカップを契機に日本でラグビーがよりメジャーなスポーツとして発展していくことを目指す」という一文があった。まさに今、その未来が訪れた。「未来は偶然ではない」。平尾さんをはじめ、たくさんの人々が日本ラグビーの未来をより良いものにするために努力をしてきたからこそ、今大会の成功があった。

そして、今があるから未来は続く。今後はラグビーが文化として定着していくための取り組みが活発化していく。「なぜ、ラグビーが必要なのか」と問われた時、より良い社会をつくり出すためには、このラグビー精神こそが必要だからと発信し続けていきたい。



略歴
1978年大阪府生まれ。
啓光学園高校で全国高校大会準優勝。
同志社大学に進み、4年時に日本代表に選出。
日本代表キャップは通算33、2007年フランスW杯に出場。
同点キックを決め日本代表のW杯連敗記録を13で止めた。
引退後はテレビ解説、普及活動、コーチなどマルチに活動している。